

で、年間3~4回刈りで、11t以上の青草が生産できます。早ばつ、湿潤にも強く、比較的低温に対する抵抗性も強い。直立型で機械刈用品種としてガットンパニックに次いで優れています。やや多汁茎のため、サイレージ調整時には充分予乾することが必要です。

(2) イタリアンライグラスと暖地型牧草の周年連続栽培

イタリアンライグラスは暖地の初春~初夏、並びに四国、九州など冬の気温が比較的高いところでは、11~2月でも刈取利用できる主要牧草ですが、とくに盛夏の7~8月は殆んど夏枯れし利用できない欠点があります。マンモスイタリアンなどの4倍体品種の出現により、盛夏をのり越えて周年利用で多収かくをあげていますが、低暖地の盛夏時では、どうしても頻繁な刈取利用ができません。このため暖地型牧草とイタリアンライグラスを組合せた周年連続栽培方法を取り入れ、年間15~20tの多収かくをあげることができます。第4表の通り、5~6月に暖地型牧草を播種し、7月から10月頃まで3~4回刈で8~10t収かくし、直ちにイタリアンライグラスを追播いたしますと、

翌年5月頃までに3~4回、マンモスイタリアンを使用すると7月頃まで9~12t、年間合計20t以上の連続利用が可能となります。イタリアンライグラス収かく後、再度暖地型牧草をバラ播いて、ハローなどで土の上に落しますが、5~6月は未だイタリアンライグラスは再生が良いので、不耕起のまま追播した場合、暖地型牧草の発芽定着が阻害される恐れもあるので、不耕起の場合はイタリアンライの早生品種の組合せとするか、又は追播後イタリアンライグラスの再生が良い場合、15~20日後にイタリアンライグラスを刈り取れば、暖地型牧草の生育が旺盛になります。但し、イタリアンライグラス収かく後、耕起してから暖地型牧草を播種することができるのであれば、多収性を考えて、マンモスイタリアンとの組合せが有利です。又最近では、このような一年生暖地型牧草の他に、永年性のバヒヤグラス、ダリスグラス、ブルーパニックとイタリアンライグラスを組合せ、毎年秋にイタリアンライグラスのみを追播することにより、3~4年間、年間通して、15~17tの生草収量をあげることも試みられております。

最も経済的で手軽な 耕土の保全と地力増進は 緑作(緑肥用作物)で

緑作の重要性

農業生産の基盤である 私共の大切な耕地は常に風雨によって侵蝕され、更に有機質の施用が充分伴わないために、地力は年々減退し、化学肥料の効果も期待ほどあらわれず、作物は不健全な

発育を呈し、総ての抵抗性が弱まって公害を心配しながらも農業使用を余儀なくされ、化学肥料、農薬の多施、多用で生産費は上昇し続ける反面肝心の農作物の生産量は思うように挙がりません。

これでは農畜産物の貿易自由化にも、又世界的にさわがれだして来た、食料不足にも対応出来ません。

今こそ、耕土の保全と地力増進を最も手軽に、然も経済的に行える緑作を推し進めて、豊かな力のある健土づくりを開始しましょう。

土壌保全、地方増進用緑作の耕種概要

導入作付場所	導入作物(品種名)	播種		施肥量と方法 (10a)	追肥時期、量 (10a)	栽培層						収量(%) (10a)		摘要
		量 (kg/10a)	法			→	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
春播麦類へ 間混作	アカクロバ または アルサイクロバ	2.0	散又は 条	-	麦刈取直後 N-3, P-4, K-4kg	麦刈り (秋鋤込) △ ◎ ///						秋1.5~2.0 春2.0~	0.75~1.0 1.0	
馬鈴薯 収かく跡地	ライ麦 ライグラス(テトライト) レブ	10.0 2.0~3.0 0.5	散	播種時、粒状肥料 N4-5, P-4, K-4kg を種子に混和同時ま き鎮圧	-	イモ掘り 葉散 ◎ △ ///						春2.0~2.5	1.0~2.0	
土壌保全用	チモシードクロバ オーチャードクロバ メドウルフェスク レッドトップ・ブルーグラス	2.0~3.0	散 带状	N-4, P-15, K-9kg	N-10, P-9, K-16kg	△ △								
豆類への 牧草中まき	短・永年性牧草 マメ・イネ科混播	2.0~3.0	畦間 条	N-4, P-6, K-4kg 粒状肥料を種子に混 和同時まき後カルチ かけ	豆刈取直後と翌早春 N-4, P-3, K-5kg	豆刈り △ △ ◎ 牧草2回刈取利用 ///						2回刈取後 秋2.0~	1.0	豆類は 畦幅 60cm